

はねバド！～On Your Mark～

STORICKS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学三年生の旭海莉は、いくつかの特待の誘いを蹴り、同じバドミントンクラブに所属している一っ下の後輩・榎寄美空の助言により、宇都宮学院への進学を決める。

そこに現れた王者・益子泪――。

原作「はねバド！」の三年前から始まる、ひとつの解釈。

目次

はねバド！〜	Mark.	Mark.
On	2	1
Your		
Mark		
〜		
3rd		
ラリー		
12	7	1

Mark. 1

「本校の特待制度には三段階のランク分けがあり——」

視界の多くを占拠している中年の男が、テーブルに置いた数枚の紙を綺麗に並べながら話している。

旭海莉はなんとなく上の空で、彼の話を聞き流していた。

(……はあ)

早く終わらないかな、とつまらなさそうな顔をした彼女には一瞥もくれず、その男は話を続ける。

海莉は彼に気付かれないように、テーブルの上に置いた、さつき受け取った名刺を手にとった。

——横浜翔栄高校。

その名前は、海莉も良く知っている。

今年出たジュニア関東大会でも、その高校の部員と当たった。

試合結果は、その記憶を反芻した彼女が心の内で苦笑するほどの惨敗だったが、まあ高校生と中学生の勝負だし、横浜翔栄と言えばインターハイの個人戦でも、たまに上位に名前が出てくるほどの強豪だ。団体戦の方は、とんと聞かないが……。

「——それで、今回旭くんは『Cランク』でお誘いさせていただこうと思っています——」

海莉は首を傾げた。

Cランク、というのはABCのCなのか、それとももつと段階が多くあるのかを聞き逃したからだが、その仕草を見て、目の前の男は何とも言えない表情を浮かべる。

(……あんまり、獲る気なさそうだなあ)

もちろんそんなことを口に出すほど、海莉は子供ではないし、自分の実力に照らしても、妥当あるいは過分な評価だと思える。

ランクがいくつだろうと、『横浜翔栄から特待の誘いが来る』というのは、ある一定のレベル以上のプレイヤーにしか訪れない出来事だ。

「海莉、あなたはどうしたいの?。」

特待の誘いのあとに、忙しい両親のせいですれ込んだ三者面談をこなし、海莉はもういい加減眠かった。

母のおだやかな運転によって、眠気はなおさら増幅される。

「うーん……バドは続けるよ、とりあえず」

「そう……」

我ながら、当たり障りのない返事だ。

単身赴任でほとんど家に帰ってこない父と、職業柄夜勤などもあり、娘と時間帯が合うことの少ない母の間に産まれた海莉は、誰にそう躰けられたわけでもなく、『手のかからない子供』に育っていった。

特別人見知りと言うわけでもないが、だいたい一番遅くに迎えに来る親を待っている間も、独りで練習が出来るバドミントンにのめり込んでいったのは、自然の成り行きだったのだろう。

「あなたがやりたいことをすればいいと思うけど……横浜翔栄、ほんとは行かないの?」

「行かないよ、遠いし」

別に、C特待が気に入らないわけじゃない。

特待が付かなくなつて、私立高校に入れるだけの蓄えは家に充分あるだろうし、なんなら横浜で一人暮らしだって、言えばさせてもらえるかもしれない。

ただ海莉には、そんなわがままを通してまで、『バドミントンをする環境』を追求する気にはなれなかった。

勝つても負けても、強いヤツと試合をするのは楽しいし、今度は勝とうと思つて練習をするのも、全く苦にならない。

身長だつてそこそこに伸びてきたし、少なくとも栃木の同世代には、勝てない相手はいない。

関東圏の中学三年生で序列をつけたなら、二桁の前半には入るだろう。

でも、それだけだ。

(ん?)

マナーモードにしておいた携帯電話が振動する。

「——えっ」

画面に表示されたメッセージと、その差出人を見て、旭は小さく声を上げた。

「どうしたの?」

「いや、ミイが携帯買ったって」

「榎寄さんところの? あそこの子、まだ二年生でしょ」

長つたらしい文面を読んでいくと、どうやら海莉も出場したジュニア大会の戦績が良かったので、そのご褒美として買ってもらったというこららしい。

まだデフォルトのアイコンに苦笑しながら、海莉はメッセージを返す。

——おめでどう。翔栄の特待来だけど、たぶん蹴るわ。

「海莉さん、翔栄って横浜翔栄っスよね?」

「そうだよ」

榎寄と海莉は、同じバドミントンクラブに所属している。

たまたま家もそう遠くないが、榎寄の方は中学から私立に通っていて、そこはいわゆる『ミツシヨン系』のお嬢様学校らしいのだが、そうは思えない角度で足を開いて座る彼女を咎めつつ、海莉は話を続ける。

「考えたけど、横浜は流石に遠いわ」

「そりゃあ……けど横浜翔栄っスよ? 勿体ねえって——」

他の学校からもいくつか『誘い』は来ているものの、それには金銭的な優遇はなく、結局それも海莉は蹴るつもりでいる。

「ま、フレゼリシアとか栄枝クラスなら行ってやってもいいかな」

「つよ。海莉さん、つよ」

ケラケラと笑っていると、榎寄に迎えが来た。

「一緒帰ります?」

「ううん、もうちよっと練習してくよ。あと一時間ぐらいで来ると思うし」

「そうすか……お疲れっス」

「お疲れ」

遠ざかっていくテールランプを見送って、海莉は練習場に戻る。

さっきまで彼女たちを指導していたコーチたちは、今度はヒマと金を持って余しているらしいご婦人方に囲まれて、どうにもやりづらそうだ。

それを横目に、海莉はノックマシンのスイッチを入れる。

ご婦人方——コーチ陣は全員の名前を憶えているが、海莉や櫛寄には見分けがつかないので、おおむね『ババア』に分類している——のウォームアップは随分と時間がかかるらしいから、一ゲーム分ぐらいは打つ時間があるはずだ。

仮にも有望選手の端くれである彼女なら、言えばコートをずっと空けてくれるだろうが、そこまで我を通すのは角が立つと思つて、海莉は所属しているクラスが終わったあと、帰りの遅い母の迎えを待つ空き時間にだけ、自分の練習をしている。

唸るようなモーター音のあと、乾いた音と共に弾き出されたシャトルに反応して、海莉はステップを踏む。

(——バック奥、バック奥……)

今使っている安物のマシンでは、コースは振り分けることが出来ないが、球足は数段階にランダムで打ち分けられる。

海莉はその一つ一つを、丁寧に右利きプレイヤーのバック奥へと打ち込んでいった。

コートの角に、シャトルの集まりが出来上がっていく。

先日の、櫛寄が携帯電話を買ってもらった大会で、海莉はくだんの横浜翔栄の選手に敗れた。

相手は高校生だから仕方ない、というのは当然分かっているが、それでも今後は自分がその高校生になるのだから、弱点は解消していかなければならない。

そのために今は、身長の高い選手を前に出させないための長いシャトルの精度を、この居残り練習で高めている。

もう十日ぐらい続けているが、だいたいどんな球が飛んできても、狙ったところに『置く』ことは出来るようになった。

ただし、お互い走り回っているラリーの最中に、同じことが出来るかどうかはわからない。

やがてノックマシンは全てのシャトルを吐き出し、短いブザー音とともにモーターを停止させた。

「……うん」

全てのシャトルを上手くコントロールすれば、拾うのも楽ちんだ。海莉は独り得意顔でシャトルを一気にかき集め、マシンに備え付けの箱に入れる。

ちょうどマシンに全てのシャトルが戻ったところで、練習場の扉から母親が顔を覗かせ、今日の練習はお開きとなった。

「すごいや結局ミイはどこまで行つたの？」

「ベスト8っす。志波姫にやられた」

志波姫――。

益子泪と並んで、おそらく来年からインターハイを席卷するだろうと囁かれている選手だ。

関東ジュニアの大会に、本来宮城の選手が出場することはないのだが、数年前の大震災の翌年から、『復興希望枠』だかなんだかという特別枠で、東北六県から何人ずつかが出場するようになった。

「あいつ、やっぱ強い？」

「ヤバいっす、全部『消され』る。たぶん向こうが風邪ひいても勝てない」

特別枠とは言え、その選考基準は通常の関東の枠と同じだ。

つまり、県の中学大会で最上位クラスの選手。

福島から来ていた友野は、県大会を二年生から連覇しているし、志波姫に至っては関東どころか全国ジュニアでも上位に入っている。

いくら櫛寄が強いと言つても、さすがに勝てないだろう。

もちろん自分も、いや猶更無理だろうな、と海莉は思った。

クラブ内での対抗試合でも、一番戦績が悪いのが櫛寄だ。

一つ一つの試合を覚えていくわけではないが、割合にしたら十のうち三つ勝っていれば上出来だろう。

ここ一年半ほどは、彼女と海莉が栃木のシングルス代表に収まっている。

幸いにして、大きな大会では『先輩の威厳』を損なう結果にはなっていないが、それはそもそも手合わせがないためだ。

やれば負けるだろうし、それが自分の才能の限界だと、海莉は認められている。

「そういや、海莉さんは？」

「ん？ 私は三回戦でサクツと負けたよ。名前忘れたけど、その翔栄の選手にね」

「はー……海莉さんでも勝てない奴いるんスね」

嫌味かよ、と海莉は彼女の頭をこづいた。

ひとしきり笑い合った後、海莉はため息をつく。

「……どうしよっかなあ」

「何が？」

「高校。翔栄は遠いからヤだし。監督顔でかいし」

後のほうは関係ないだろうと思いつつ、櫛寄も自分の『一年後』を彼女に重ねる。

「ウチは海莉さんと同じ高校でやりたいっスけど……」

「——じゃあ、ちよつといいトコ選ばなきやじゃん？」

Mark. 2

横浜翔栄を断る——と言ったとき、クラブのコーチたちは、一言目には勿体ないと口をそろえたが、現実問題として、確かにC特待という恵まれない待遇では、せつかくの才能が腐ってしまう可能性もある。

数日経ってから、波風の立たないように断わっておいた、とコーチから伝えられて、ではどうしよう、と海莉は頭を巡らせる。

別に、家にお金がなくて、C特待を嫌ったわけではない。

「……………」

中学校からの帰り、いつものバドミントンクラブへ向かうバスの中で、偶然櫛寄と出会う。

「あれ、海莉先輩?」

「おう——珍しいね、バスなんて」

学生の帰宅時間帯ではあるものの、近隣に学校は少なく、しかも駅とは反対方向に向かう路線では、乗客もまばらだ。

それでもなんととはなしに立っていた海莉は、櫛寄に促され、彼女とともに一番後ろの広い座席に座る。

「今日ウチ遅いんすよ、親」

「ふーん……」

相変わらず足の開き具合は危なっかしいものがあるが、スカートが長い落ち着いた制服のおかげで、彼女の下着の色という情報が海莉の脳内にインプットされることはなかった。

中学から私立のお嬢様学校に通わせるぐらいだから、櫛寄の家は裕福なのだろう。

クラブでの練習がある日——ほとんど毎日のことだが、櫛寄はいつも、親の車で送り迎えをされている。

小さな診療所の前で幾人かの乗客が乗り込み、郵便局の前で降りていく。

海莉たちの通うクラブは、このバス路線の終点に近い停留所が最寄だ。

学校前のバス停からそこまでの回数券を、海莉は財布から取り出す。

榎寄の方はICカードを手をしている。

回数券のほうが一回分安くなるのだが、そもそもバスに乗ることが珍しい榎寄のことだ、あまり細かい事は考えないらしい。

「――あ、次だね」

「ういす」

榎寄が押したボタンが赤く灯る。

ほどなくして、バスは背の高い建物が目立つ交差点を左に曲がり、バス停に止まった。

「よいしょ……」

ラケットを何本も入れた上に、着替えも入っているバッグはそれなりに重い。

「おぎースー！」

コーチに大声であいさつをする榎寄と並んで、海莉は小さく頭を下げた。

「旭、ちょっと」

「……はい？」

コーチが海莉を呼ぶ。

別に、榎寄のように元気よくあいさつしなかったことを咎められるわけでもないだろう。

玄関にあるロッカーの脇に大きなカバンを立てかけて、旭はコーチのもとに歩いてゆく。

すると、おばさま連中に人気の若いコーチは、その高い目線を彼女に合わせるようにして背中を丸めて、旭に小さな声で言った。

「――実はな、宇都宮学院の監督が来てるんだ」

「宇都宮学院？」

よく聞く名前だ。

ほとんど立ち読みで済ませるが、たまには買っているバドミントン雑誌でも、インターハイ特集などではその学校名はメジャーなもの。

個人戦ではほとんど常連と言っていていいぐらい、シングルスもダブルスも毎年のように出場している。

他では真岡聖稜とか、小山西、宇都宮城南といったところが県内では有名だが、そのあたりはどちらかといえば団体戦の方が強くて、つまりそれは、宇都宮学院がさほど有望選手の『青田買い』をしていないということだ。

「まあ、見に来てるのは檜寄のほうなんだが……俺たちコーチが相手だとアレだし、今日は檜寄と試合をしてもらってもいいか？」

「ああ……いいですよ、別に」

そりやそうだよな、と海莉は納得しつつ、重いラケットバッグを持ち上げ、檜寄を追って更衣室に入る。

まだ二年生なのに見に来るといふのは、それだけ彼女の評価が、こないだのジュニア大会で高まったということなのだろう。

もちろん、『旭海莉といういい選手もいるぞ』という口添えはしてやる、とコーチは言っていたが、とりたててうれしくもない。

なにしろあそこは、宇都宮学院は全寮制だ。

事情を聞いた檜寄は、その宇都宮学院の指導者らしき男性——細身で背が高く、天然パーマの、まあタレントで言えば大泉洋のような、というのは海莉の過大評価だろうか。

ともかく、その矢板とか言う指導者に軽く自己紹介をした後、海莉の対面に立つ。

「じゃ、行きますよ海莉先輩！」

「はーい」

と、海莉はその矢板監督が、案外自分にも熱い視線を送っていることに気付いた。

横浜翔栄から特待の誘いがあった、というのは、彼らの学校のアンテナにも引っかけかかっているのだろう。

ただ、今日の主役はあくまでも檜寄だ、と海莉は気持ちを落ち着ける。

きちんと自分の実力を発揮してやらなければ、櫛寄の実力も正しく見定めてもらえないだろう。

「——ふッ！」

息を漏らすほど強いロングサービスを、櫛寄は放った。

(……うん)

彼女との対戦は、その本気度を別にすれば数えきれないほど、たくさんあった。

小さい子たちの『教材』として、クラブの中で試合をすることだつて多いし、今日もひとつかふたつ下ぐらいの少女たちの一団が、たぶん海莉たちの一つ前のコマで練習をしていたのだろう、汗を拭きつつ遠巻きに見つめている。

もつとも、最近ほとんど櫛寄が勝っていて、最初の頃は彼女も『手、抜かないでくださいよ』なんて冗談交じりに言ってきたのだが、ここところは『格付け』が済んでしまったようで、試合後のレビューでもここに注文を付けられることも多くなった。

もちろん海莉にとっては、単純にありがたいことだし、自分の『才能』の天井が見えつつあった中でも、モチベーションを保つのに役立っている。

それに、今日の海莉は、『勝ちたい』と思ってコートに立っていた。ステツプバックして深いロブを返しつつ、旭は前をケアする。

彼女に比べて上背のない櫛寄は、ネット前を得意とするプレイヤーだ。

まあ、そこを志波姫に見切られて長いショットの応酬に引きずり込まれたのだが。

流石に精度では勝てず、徐々にポイント差を広げられていったところに、彼女は抜群に『抑え』の利いたドロップで櫛寄の戦意をへし折ったのだという。

(ううん……)

しかし、今日の相手は海莉だ。

そこまで上手くはない。

存外成長が豊かで——特定の部位は除く——、上から叩き下ろすこ

とに拘ればあるいは、まだまだ櫛寄など寄せ付けずに戦っていけるかもしれないというのは海莉自身も理解していたが、早晚彼女だつて成長期に入るだろうし、何よりそんなフィジカルに頼った戦い方では、『教材』としてうまくない。

自分がお腹を痛めて産む日はいつになるやら想像はつかないが、それでも年下、言い方を変えれば子供は好きだし、好かれない。

けれども、今日は櫛寄の実力を測るための試合だ。

(……強打で攻めるか)

海莉が負けた、あの横浜翔栄の高校生みたいに。

ネット前から大きく『逸らし』を入れて、海莉は距離を置く。

アジリテイに優れる櫛寄と言えど、ネットから剥がすには苦勞しい。

テンポを緩めまいとする強いドライブをいなして、海莉はこのところ練習していた『バック奥』に狙いを定め、左足に体重移動して再びネット前に付こうとする櫛寄の頭上に、ややアーチの低いドリブンクリアを打ち込んだ。

「——っ」

クロスに飛んでいくシャトルに、櫛寄はなんとかラケットを投げ出す。

しかしながらコースはともかく、深さは大甘。

海莉は難なく上からスマッシュを叩き落とし、最初のポイントをモノにした。

はねバド！〜On Your Mark〜 3rd
ラリー

もう、何度もやりあった仲だ。

海莉は丁寧に、櫛寄の急所を突いていく。

間合の開いたラリーでは、どうしても球威に劣る櫛寄が受け身になっってしまう。

ジュニア大会で志波姫にやられたドロップを早速取り入れたのか、フェイントを仕掛けて得点を奪い返すシーンもあつたが、概ね試合は海莉のペースで進み、五点差で最初のインターバルに飛び込んだ。

(……なんだよ)

ベンチに座って汗を拭いている海莉はふと、件の高校の監督がこちらを見ているのに気付く。

今日の主役を喰ってやろうなんて気は、サラサラ無いのに。

それに——今のところ櫛寄は、本調子ではない。

もつと脚を出せば取れたシャトルもあつたし、一つ一つのショットの精度も甘い。

ウォーミングアップが足りないということは無さそうだが、『判断』に使う頭の方はまだ温まっていないようだ。

審判役のコーチに促され、二人は再びネットを挟んで向き合う。

ロングサーブスを打ち、海莉はホームポジションに戻った。

櫛寄の返球は球足の速いドリブンクリアだが、重心をニュートラルに保つことを心がけていた海莉は、難なく追い付いてヘアピンを返す。

いいところなしではあまりにも可哀そうだから——というわけではないが、自分の選択が少し甘かったと彼女は後悔した。

『ネット前』は上手いのだ、櫛寄は。

絶品のクロスネットを返されて、海莉は慌てて身体を反転させて追いかけるが、なんとか拾い上げたシャトルは遠くに逸らしきるまでは至らず、櫛寄に叩き落される。

ここで一気呵成に、とばかりに早い間合いでショートサーブスを放った櫛寄は、前掛かりになった海莉の頭上を通過するクリアーを上げた。

「く——」

海莉が打ったラウンドザヘッドのロブは、アーチを目いっぱい高く上げた守備的なショットだ。

時間的な余裕は得られたが、それは相手も同じだ。

ネットぎりぎりの高さから切れ込んでくるカットスマッシュを再びロブで返球しながら、海莉は櫛寄のプレイスタイルについて再検証を始めていた。

オーソドックス、と言えばオーソドックスなのだろう。

彼女には大きな身長やパワーといった武器はない——少なくとも、今のところは。

中学生の女子として著しく発育が悪いというわけではないが、海莉のように手足が長いわけでもない。

どちらかといえば手、つまりウイングスパンは短い方だ。

それが櫛寄の粘り強さにも繋がっているし、また逆に、それほど強打を打てないという弱点にもなっている。

ただ、『走り』に特化したプレイヤーを志すのならば、それは徐々に利点になっていくのだろう。

身体に近いところ——懐でシャトルを捉えて、相手に的を絞らせない球出しが出来れば——。

クリアーの応酬から、海莉は櫛寄のボディに一発、ドライブを差し込む。

(……まあ、決まらないよな——)

櫛寄は器用に肘を抜き、バックハンドで短い羽根をネット前に落とすして来た。

ただ『逃げる』だけではない。

海莉にスマッシュを連打されると苦しくなるのは、櫛寄も理解している。

そして今日は、あえてそうした戦術を彼女が採ってきていること

も。

二十点を窺う手前で、スコアは同点になった。

榎寄は持てる武器を活かす戦術——すなわち、海莉を左右に振り回しつつ、ここぞで裏をかいてバランスを崩させている。

(ううん……)

表情は変えないままで、海莉は心の中でもがいていた。

ショットの正確性に然程の差はないが、榎寄の方はより多くのリスクを背負って打ち込んできている。

シングルの狭いコートを目いっぱい幅広く使っているのはなにも、自分の長所を矢板とか言う高校の監督にアピールするためだけではないだろう。

まして彼女の場合は、シャトルに触れる位置が海莉と同等に高い——身長は低いにもかかわらず。

つまり、榎寄の方が先に反応し、シャトルに追いついているということだ。

一歩先んじた彼女が打ったロングサーブスを、海莉は思い切り遠くへ叩き返す。

ほとんどコートの真ん中だ。

オーバーか——一瞬だけ迷った榎寄は、シャトルがラインに向かって落ちていく寸前でラケットを振り上げた。

「っ——」

見送るものとラケットを下げていた海莉は、慌ててそのシャトルを追う。

油断ではない。

そもそも自分もアウトだと思っていたし、本当はそうだったかもしれないのだから。

虚を突かれたせいで反応が遅れた海莉は仕方なく、サイドアームで榎寄のバックサイドヘッドライブを打ち込む。

ほんのわずかにスピードを殺し、その分丁寧にミートして。

『軽量級』の櫛寄にとって、それに追い付くことは容易かった。

振れた弾道のシャトルがネットのぎりぎりを越えて、こちら側に飛んでくる。

同じくヘアピンで返したところに素早くプッシュを差し込まれ、海莉が空振ったところで第一セットはマツチポイントを迎えた。

点差は僅かに一点だが、中盤までは優位に進めてきたはずなのに——と海莉は焦燥感を覚えている。

バドミントンは言うまでもなく、点の取り合いのスポーツだ。

ゼロスコアでゲームが終わる可能性すらある他の、例えば野球やサッカーとは違う。

まあ、そのあたりの競技は女子よりも男子の方が人気があるが、ともかく、点数を取られること自体はそれほど気に病むことはない、と海莉は自分に言い聞かせた。

最後の一点を『自分の形』で奪うべく、櫛寄はロングサービスで海莉をコート奥へと押し込む。

(これを普通に返しても厳しい……)

海莉は一瞬だけシャトルから目を切り、櫛寄の動きにピントを合わせた。

ホームポジションからやや前に——海莉のコースを切るように、少しだけ前掛かりに立っている。

ストレートはコースを閉められているが、少し急いたステップでのラウンドザヘッドからクロスに打つのは、ミスしてネットに掛けてしまう危険もあるし、海莉の打球速度では抜けない公算が大だ。

(——『落とし』は拾われる、一回逸らすしかないか——)

先刻打ったクロスロブよりもずっとアーチを低くして飛距離を稼ぎ、海莉は櫛寄のバック奥へとシャトルを飛ばす。

何度もやりあつた仲だ。

こういう時、『守り』に入った海莉がどこに打ち込むかを、櫛寄はよく理解している。

海莉がラケットを振り抜くよりも先にバックステップを踏んでいた彼女は、サイドへ二歩踏み込み、大きく身体を撓らせてスマッシュ

ドライブを打ち返す。

だが、コースは甘い。

お互いにネットから離れたポジションで、相手に与える時間的猶予を最小限にとどめる選択をした。

大きく空いたクロスサイドを埋めるべくダツシユする櫛寄の逆を突くように、海莉は低く構えた姿勢から縦にラケットを振り抜き、わずかに変化を付けた。

「ち——ッ」

櫛寄は慌てて方向転換するが、ネットを越えて急速に沈み込んでくるドライブカットを打ち上げることが出来ず、白帯に引っ掛けてしまふ。

だが、幸運にも——海莉にとっては、そのポイントでセットを奪われたのだから、不運と言うべきだったが——ほんの一瞬ネットに絡んで動きを止めたシャトルは、力なく海莉のコートに落ちた。

「あ……きーせん、海莉さん」

「——いいよ」

表情を変えず、海莉はネット前まで歩き、落ちているシャトルをラケットに乗せる。

それから櫛寄のコートにそれを戻すまでの間、彼女はずっと立ちすくんだままだった。

ハードラックだ、どう見ても。

短いラリーを通じて、少ない手数で相手を崩したのは海莉の方。

それでも、こういうことは往々にして起きる。

ドライブカットが多少長かったせいで櫛寄が追い付けたのかもしれないし、あるいは逆に、もっと緩く、変化を多くした方が得点にはつながったかもしれない。

海莉にとってはそうした原因を考えることの方がよほど重要で、ネットインだからと言って、全く気にするようなことでもなかったのだ。

気分は良くないが、それはおそらく、櫛寄が無事に一セットを獲れたことに安堵した自分に対して、何とも言えない怒りが心の中にある

のだろう。

インターバルの間、櫛寄はもうさつきのごとは忘れたように、振れたガットを指で整えている。

海莉の方も、やることは同じだ。

もつれ込んだとはいえまだ一セット目で疲れはないし、どちらかと言えば海莉の方がカット系の打球を多く選択した分、ガットのズレは大きくなっている。

(……ん、切れそうだな)

いつから使っているだろう。

このラケットは、最初にも買ってもらった入門用では物足りなくなつて、親に買ってもらった『いいやつ』だ。

コーチのアドバイスもあって、同じものを二本揃えてある。

決して安くはないが、普段あまりモノをねだることのない娘が珍しくせがんだのだ。

母も嫌な顔一つせずに、海莉にそれを買いはやめる。

同じ仕様のラケットを複数揃える——それはつまり、『習い事』の範疇を越えて、競技の世界に足を踏み入れる、ジュニアプレイヤーとして戦っていくということの意思表示でもあった。

海莉はふと、ラケットを買ってもらった頃のことを思い出していた。